

国内で新型コロナウイルスの感染者が確認された1月から1年が経過している。特に大学では、緊急事態宣言により入構が禁止されてからの数か月、ほぼ全ての大学で遠隔授業が推し進められた。この事態について、FDの第一人者であり日本高等教育開発協会(JAED)会長の佐藤浩章氏(大阪大学全学教育推進機構准教授)は、「全大学教職員が大学とは、教育とは何かを再考する機会となった」と述べる。FDの専門家から見た現在の大学教育の在り方について佐藤会長に聞いた。

佐藤JAED会長に聞く

○対面と遠隔のベストミックスの模索
佐藤会長は「この数か月間に史上最大規模のFDが、日本全国ならびに世界中の大学において進出した」(佐藤浩章(2020)「ポスト・コロナ時代の大学教員とFD」)と述べる。FDが加速させたその変容「現代思想」(青土社)と述べる。我が国では、4月7日の「緊急事態宣言」の発令により、ほぼ全ての大学が入構禁止になるとともに、遠隔授業へと移行した。後期になり対面授業が増加したとはいえ、この経験は大学教員にとって自身の授業を見直し、教育とは、大学とは何かを考

える機会になった。「以前にも対面と遠隔のベストミックスの模索」
前にもクリックカーを使うとか、資料をLMSにアップするといったICTの活用は一部で行われていたが、今回はほぼ全大学でリアルタイムもしくはオンデマンド等の授業が行われました。質的データを持ち寄り、全国的にも量的にも授業のICT化が一気に進みました。その質はさておき、教員が実施できる教育方法や、学生の学習方法のレパートリーは確実に増えた。「授業設計では、まず学習目標を明確にし、これに基づいて教授法を選択します。これまで対面を前提としていたが、そこにオンラインという大きな選択肢が加わりました」。

「大阪大学の学生にアンケートを取ったところ、オンデマンド型授業の評価は高かったようです。録画教材は分からない箇所を何度も繰り返し視聴ができる反面、既知の箇所は倍速で視聴できることがメリットと感じたからでしょう。意図せざる結果として「個別最適化学習」が実現できた



型授業で学習を成功させるためには、「自己調整学習」が求められま

とって、オンデマンド型授業では十分に学習が進められないため評価は低くなるかもしれない。対

は初年次教育によってスタディスキルを身に付けさせようとしている。例え

る友人や先輩はいるか」などである。また高校の出席日数からも中退傾向の予測ができる。

また、今後、3つのポイントに基づく教学マネジメントに新たな視点を加えるとすれば、各大学において、自己調整学習をどの程度、備えた学生を入学させ、どのようなプログラムで自己調整学習を身に付けさせていく

と課題となかったのではなかったのだと痛感しました。『学習者中心』とは、

「学習者中心」とは、学生の意見をそのまま尊重するということもまた異なる。教員、学生双方が「学習」にフォーカスをあてて議論をするところ

今こそ学内で「学習者中心」の議論を コロナ禍の大学教育を振り返る

一方、オンデマンド型授業が苦手な学生もいる。テスト直前に録画教材をまとめて倍速で視聴したり、夜中に視聴するなど生活が乱れたりしてしまうこともある。

「リアルタイムかオンデマンドが良いかは、学生一人ひとりの学力、意欲・関心、専門領域、学習スタイルに依って異なりますが、オンデマンド

「自己調整学習が身に付いている学生は、学習の習慣づけができているため自分のペースで学べますから、オンデマンド型授業の評価は高くな

とくに、相談ができる教職員や友人・先輩がいることで、孤独にならないと

かといった観点も必要になるだろう。

授業課題が多過ぎる問題
授業であまりに多くの課題が出ることで、学生は寝る時間がない、といった話題もあったが、佐藤会長はこの問題を次のように見ている。

「各授業の学習時間や、学生の学習負担を把握する。その上で、最適な学習量や質に調整する

「1990年代半ばから『教育から学習へのパラダイムシフト』、『学習者中心の教育』が叫ばれてきた。しかし、このコロナ禍での教員の議論を前回の日常に戻すのではなく、『自分たちの大学での学習はどうなるか』と目標を身につけているのか『きちんと望ましいのか』という本質的な問いについて、学内で議論していくことが求められています」。